

銀のペンセル

小川未明

青空文庫

三味線しやみせんをひいて、旅たびの女おんなが、毎日まいにち、温泉場おんせんばの町まちを歩あるいていました。諸国しよこくの唄うたをうたつてみんなをおもしろがらせていたが、いつしか、その姿すがたが見みえなくなりました。そのはずです。もう、山やまは、朝晩あさばんざむ寒さむくなつて、都みやこが恋こいしくなつたからです。

勇ゆうちゃんも、もう、東とうきよう京けいのお家うちへ帰かえる日ひが近づちかつたのでした。ここへきて、かれこれ三十日にちもいる間あいだに、近傍きんぼうの村むらの子供こどもたちと友ともだちになつて、いつしよに、草花くさばなの咲さいた、大おおきな石いしのころがつている野原のほらをかけまわつて、きりぎりすをさがせば、また、水みずのきれいな谷川たにがわにいつて、岩魚いわなを釣つつたりしたのであります。

「君きみ、もう、じきに東とうきよう京けいへ帰かえるのか。」と、一人ひとりの少しょう年ねんが勇ゆうちゃんにききました。その子こは顔かおがまるくて、色いろの黒くろい快活かいかつの少しょう年ねんでした。勇ゆうちゃんは、この少しょう年ねんが好すきで、いつまでも友ともだちでいたかつたのです。

「君きみのお家うちが東とうきよう京けいだと、いいんだがな。」と、勇ゆうちゃんは、いいました。

「君きみのお家うちこそ、こつちへ引ひつ越こしてくれば、いいのだ。」と、少しょう年ねんは答こたえました。空そらの色いろが、青あお々あおとして、白しろい雲くもが高たかく野原のほらの上うえを飛とんでゆきます。

あとの子供こどもらは、いつか、どこかへいつてしまつたのに、その少しょう年ねんばかりは、名残なご

惜しそうに勇ちやんのそばから、いつまでもはなれずにいました。

「いいところへ、つれていってやろうか。」と、少年は先に立って、草を分けて、山の方へ歩きました。

「どこへゆくんだい？」

勇ちやんは、顔をあげて、いくたびもあちらを見ました。少年は、だまって歩いていましたが、やがて目の前に、林が望まれました。葉風が、きらきらとして、木の枝は、風にゆらめいていました。もう口を開けているくりの実がいくつも、枝のさきについているのでした。

「僕、見つけておいた、いいものを取ってきてあげるから、ここに待っていたまえ。」と、少年は雑木林を分けてはいりました。そして、あちらの、こんもりとした、やぶのところへいって、しきりと、つるをたぐり寄せていました。勇ちやんは、後ろについては、勇気がなく、林の端に、立って待っていると、少年は紫色のあけびの実をいくつも、もいできてくれたのであります。

「この森には、りすがいるから、みんな食べてしまうんだ……。」と、少年は、いいました。

「勇ちゃんは、はじめて、りすは、こんなところにすんでいるのかと知りました。」

「東京へ持って帰って、お土産にしよう。」

「勇ちゃんは、兄さんや、姉さんや、また、近所の叔母さんに、これを見せたら、どんなに喜ばれるだろうと思いました。」

「東京へ持って帰るなら、まだ、いいものがあるぜ……。高山植物が、いいだろ

う……。」

「高山植物があるの？」

「勇ちゃんは、少年について、こんどは山の方へ上ってゆきました。山と山の間にな

っている谷合いにさしかかると、日がかげつて、どこからか、霧が降りてきました。岩角に白い花が咲いているのを、少年は、見つけて、

「これは、うめばちそうだ。」といって、丁寧に根から掘ってくれました。

また、湿っぽい、日のわずかにもれる、木の下をはって、小さいさんごのような赤い実のなっているのを指しながら、

「これは、こけももだ。こうして持っていったら、根がつくかもしれない。」と、少年はしんせつに、掘ってくれました。

温泉場の町まで、二人は、いつしよにきました。別れる時分に、

「君、また明日のいまごろ、あの大きなしらかばの木の下のあわなない？」と、勇ちゃんはいいました。

無邪気な、黒い目をした少年はうなずいて去りました。

「なにか、僕の持っているものをやりたいな。」と、勇ちゃんは少年と別れてから、考えていました。

「明日あつたとき、僕の大事にしている銀のペンセルをやろう……。。」と、心の中で、きめました。いつしか、約束した翌日とは、なつたのであります。

しらかばの下へ、勇ちゃんはくると、すでに少年は待つていました。おたがいにここにことして、また、珍しい草をさがしたり、石を谷に向かつて投げたりしましたが、勇ちゃんは、忘れないうちに、持つてきた、銀のペンセルを出して、

「これを君にあげよう……。。」と、少年に渡そうとしたのです。

少年は、手を出したが、じつと見て、それをもらおうとはしませんでした。

「僕、こんないいものいらなない。」と、顔を赤くしながら辞退しました。

「いいから、君にあげよう。」と、勇ちゃんは、無理にも取らせようしました。

「僕、鉛筆があるから、いらぬ。」と、少年はなんとも取らなかつたが、ついに、駆け出してしまったのです。

勇ちゃんは、あとで、さびしい気がしました。それから、温泉場を立つ日まで、ふたたび少年を見る事ができなかったのです。東京へ帰る汽車の中でも、勇ちゃんは、少年のことを思い出していました。

「なんで僕のやろうといった、ペンセルを取ってくれなかつたのだらうな……。」
 こう思ったが、一方に、ペンセルなんか欲しがらない、少年が、なんとなくなつかにしく感じられたのです。

高山植物は、都会へ持つてくるとしおれてしまいました。

「どうかして根のつくように。」と、勇ちゃんは高い物干し台の上に、こけももとうめばちそのの鉢を持つてきておいたのです。青い青い夜の空は、遠く、北の方に垂れかかっています。そのかなたには、これらの植物のふるさどがありました。星の光が高原の空にかがやいたように、夜ふけの空にきらめき、さすがに、都会にも、秋がきたのを思わせて、風がひやひやとしました。

「ここに置いたら、山にいるような気がして、根がつくかもしれぬ。」と、勇ちゃんは、

少年の取つてくれた草花を大事にかばいました。そしてあくる日、夜の明けるのを待
つて、物干し台に上がつてみますと、なんとしても、だますことはできなく、うめばちそ
うの白い花は頭を垂れ、こけももの細かい美しい葉は幾分か黄ばんでいるのです。
あの清浄な、高い山でなければ、これらの草花は育たないことを知りました。勇
ちやんは、それから毎晩のように物干し台に上がつて、青い夜の空をながめながら、高
い山や、少年のことを思い出していました。白々として、銀のペンセルのように、
天の川が、しんとした、夜の空を流れて、その端を地平線に没していました。
「僕は、こんないいものはいらない。」といった、少年の言葉が耳にひびいて、こけ
ももの赤い実のように、うめばちそうの白い花のように、勇ちやんには、未知の山国の
生活がなつかしまれたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 7」講談社

1977（昭和52）年5月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第6刷発行

底本の親本：「未明童話集5」丸善

1931（昭和6）年7月10日発行

初出：「児童時代 創刊号」

1930（昭和5）年12月

※表題は底本では、「銀《ぎん》のペンセル」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：きゅうり

2020年5月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作ら

れました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銀のペンセル

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>